

序章

「ねえパクリ。今晚、僕の家で遊ばないか？」

下校中、一緒に並んで歩いてた拓海が、首に巻いているマフラーを直しながら、これまでの話題を急に変えた。

「今晚って……拓海の家に行っても親父とか、おふくろさんとか居るだろう？ 遊ぼうって言われても親たちが居るんじゃ面白くないよ」

「それがさパクリ、お父さんもお母さんも仕事の関係で明日まで帰ってこないんだ」

おかしい、と思った。親父やお袋が居ないぐらいで、わざわざ俺を呼ぶだろうか？ それにしても休日前に親が仕事で居ないなんて、さすが金持ちの息子だ。

「明日まで居ない、と言う事は明日の朝まで一緒に遊ぼうって事か？」

「実はさ、お父さんのウイスキーを、いっぺん飲んでみたかったんだ。出張で居ないうちにこっそり飲んでみようとか前から計画していたんだよ」

不自然だと思った。大学受験を控えたこの時期に、ワザワザ怒られるような事をする必要はない。何かを隠しているような、そんな気がした。

「ベッドはどうする気だ？ 俺は寝るとき、ベッドじゃないと寝られないからな」

「ああ……それは僕のを貸してあげる。僕は布団をもってきて寝るから」無理している、と思った。普段、自分が寝ているベッドは、たとえ親友といえども、貸したくないと思うはず。拓海の弱みを握れるような気がした。

「何か隠しているだろう、拓海」

「えっ、何も……何も隠していないよ」俺の推理は間違いない、と思った。

「ウソ言うなよな、拓海。俺たち親友だろ。親友なのに本当のことを話せないなんて。それに本当のことを言えるのが友達だろ？」

「……でも、パクリに言うとか笑うもんな」

「俺が笑う訳ないだろ。こう見えても拓海の親友だぞ」

「本当に笑わないか？」

早く自分の弱点を話すんだ！

「分ったよ、そんなに言うんなら話すよ。実はさ、夢を見るんだ」

夢？ 普通、夢って誰でも寝れば見るものぐらいいあるだろう。ひよっとすると拓海はやつ、夢を見るのが怖いんだな。

「十八歳にもなって夢を見るのが怖いのか？ ちよっと情けないと思うよ 実際問題として」

「怖くなんか無いよ、かえって楽しいぐらいなんだ。メールが届くんだ、僕が寝付くと決まって携帯に楽しいメールが届くんだよ」

夢の中で携帯にメールが届くと、それが楽しい夢か？ だいたい、メールが届いても夢の中だったら意味が無い。何を言いたいのかまったく分らん。

「それで？」

「届いたメールを開くと『夢の国へようこそ』と書いてあって、その下のアドレスをクリックすると不思議な事が起こるんだ」

「不思議な事って何？」

「例えば今朝見た夢だと、アドレスをクリックした瞬間に目の前に二十枚組のDVDが現れるんだ。するとそれを見つけたお母さんがすごく喜んで持っていくんだ」

「おふくろさんが喜ぶのか？」

「そうなんだ、でも不思議な事にお母さんはそのDVDを見ながら泣いているの。『どうして泣いているの？』と聞いたら『子供には分らないわよ』だって。馬鹿にしているよね」

二十枚組のDVDを見て泣くって、いったいどんな映画だ？

「そのDVDってどんな題名だ？」

「よく分らないけど、日本の映画ではないみたいだった。男と女が出演する普通のドラマみたい、たぶん季節は冬だと思うよ」

ますます分らん。日本の映画ではなく、男と女が出演する冬のドラマ……

「それよりも拓海、いったいこの夢のどこが問題なんだ？」

「それが朝食の時に、テーブルの上にそのDVDが置いてあるんだ」それってお袋さんが買ってきたDVDを見て、無意識の内に夢の中に現れただけの事だろ。

「お袋に聞けば良いじゃないか、そのDVDどうしたのって」

「それが聞けないんだ、最近同じ様な夢が続いているし、それに夢の中で見たはずのメールが残っているんだ。僕の携帯に」

メールが残ってる、それだと夢ではなく現実に起こっているって事か？

「ちよつと見せてみるよ、そのメールを」

本当だ、それらしいメールが残ってる。一度クリックしたら無効になりま  
す、とも書いてある。確かにアドレスらしい痕跡がある。だけどこれって誰  
かが悪戯したのかも知れない。こんな文面なら誰でも書けるし。

「このメールの送り主は誰？」

「分らない。誰が送ってきたのか、まったく分らないんだ。それに不思議な  
事に一日過ぎるとそのメールが無くなるんだ」

「無くなるって、メールそのものが消滅するってことか？」

「そうなんだよ、寝る直前までは残っているのに次の朝見たら無いんだ」

「それって家族の誰かが、いたずらをしてるんじゃないのか」

「家族って、お母さんか、お父さんがいたずらをしてるって事？」

確かに親父やお袋が子供の携帯にいたずらをする、とは考え難い。だから  
と言って現実に起こった出来事とも考え難い。携帯に残ったメールがなけれ  
ばただの夢って事になるけど、それじゃ、携帯に残っているメールの説明が  
出来ない。いったいどんな風に考えれば良いんだ？

「ねえ、パクリ。雪だよ、雪が降ってきたよ」

本当だ。寒いって思ってたけど、今年最初の雪だな、初雪だ。積もりぐら  
い雪が降れば楽しいのに。

### 初体験

テレビゲームがいっぱいできると楽しいと思っていたのに、いくらやって  
も怒られないと、かえって面白くない。と言うか。もう飽きたし……何時に  
なったんだろう、もう夜の十一時か。

なんか気苦しいと言うか、重たい雰囲気と言うか、やっぱり来なければ良  
かった、拓海の家なんか。なんか涙ぐんできたな俺って。それにしても雪  
がじゃんじゃん降るな。

雪は降る、メールは来ない。雪は降る、重い心に。空しい夢と白い涙。鳥  
は遊ぶ、夜は更ける。ウーン、俺って詩人かもしれない。

「それじゃパクリ、僕はそろそろ寝るから、作戦通りチャンと見張っていて  
よ、僕の携帯電話と僕の事」

「ハイ、ハイ。分ってますよ」

くそっ！ 何で俺が拓海の寝ている姿を一晚中見張らないといけないん  
だ？ ……そういえば拓海はやつ、ウイスキーがあるって言っていたよな。

滅多にないチャンスだからちよつとだけ飲んでみようか。どんな味か知りた  
いし。そうだよ、元々、言い出したのは拓海だし、遠慮する事はないよな。  
「ちよつと拓海。ウイスキーがあるって言ってたよな。持って来いよ、一晚  
中起きているんだから、時間つぶしになんか無いと」

「エー、本当に飲むの？」

「言い出したのは拓海の方だろ。ぶつぶつ言わずに持って来いよ」

「分った、それじゃ、持ってくるよ。それで何がいるの？」

「何がって、ウイスキーとコップだよ」

「さすがパクリ、飲み慣れているって感じだね。すぐに持ってくるよ」

あれっ、他に何かいるんだったかな。確か親父はビールを飲むときにコッ  
プにいっぱい入れて一気に飲んでいたよな。あんな感じでウイスキーも飲め  
ば良いんだろう……そういえばウイスキーのコマーシャルでは氷が入って  
いたよな……アレは夏だから冷やすためか？ 今は冬だから、そのまま飲め  
ば良いだろう。

「はいパクリ、持ってきたよ」

「オウ、悪いな……って、やけに小さいコップだな。親父がビールを飲む  
ときはもつと大きいコップ、と言うか大きなグラスだけだな。ビールとウイ  
スキーって飲み方が違うのか？ 何だよ拓海、そんなに見るなよ。初めてウ  
イスキーを飲むって事がばれるだろ。」

えーと、こうやってコップに注いでと。あれ、ビンのレットルに何か書い  
てある「ブランデー・クルボアジェ・V S O P？」ブランデーってウイスキ  
ーと違うのかな？ 何でも良いや、呑んで死ぬ事はないだろ。飲む物だし。  
「やっぱりパクリってすごいね。飲みなれた感じだし、注ぐ手つきとか、コ  
ップの持ち方とか大人のイメージ。それじゃ僕は寝るからあとはお願いな」

「分った、任せときな」

さて、それじゃ飲むか。わが人生における初体験だ。待てよ、せっかくだ  
から雪を見ながら飲むか。しっかりと右手にコップを持ってと。左手は腰に  
あててと。確かコマーシャルでやっていたよな、こんなポーズ。

ゲツ、マズイ。と言うか熱い。と言うか痛い。いや、そんな事を考える余  
裕なんて無い、苦しい。

「なんじゃこりゃ」

痛い、痛いよ。まるで拳銃で腹を撃たれたような、本当に血が吹き出てく  
るような、変な感触がある。これじゃ白いサファリジャケットなんか着てく  
るんじゃないかった、ジーパンなら汚れてもいいけど、白は汚れるもんな。

ひよっとして俺、死ぬんじゃないのか俺って。死にたくない、死にたくないよ。口の中が火傷したようだ、何かくって冷やさないよ。そうだ、お新香がいい、シンコが食べたい、シンコ……。

「パクリ？ 大丈夫、何か喰っているけど」  
「うっ！ 大丈夫、大丈夫だ。ただ妄想してただけだよ」

本当に死ぬかと思った。いやまだ首の辺りが苦しい。本当に火傷したかもしれない、なんか気持ち悪くなってきたし、水でも飲もうか。

「拓海、ちよっと水を飲んでくるわ」

「それなら一階のキッチンに行けば冷蔵庫にミネラルがある筈だから」

一階かよ、くそっ、階段を下りる訳か。あれっなんかふらつくな。真直ぐに歩けないよ。ウツ、まずい吐きそうだ、急がないと。だけど歩けない、真直ぐに歩けないよ。階段だ、ちゃんと降りられるかな俺。

キッチンってどこだ？ こっちか。ああ、冷蔵庫が有った。ミネラルはどこだ、あった、有った。やっとなんか心地になった。さてと二階に戻るか。もう十二時が近いだろうし、拓海のそばに居てやらないとな。

二階に上がる階段って、こうやって見るとけっこう長いよな。いったい何段あるんだろう。一、二、三……あれっ、ぼやけて見える。おかしい、まともにも数える事ができない。それよりも……フアー、あくびがでた。眠たくなってきた証拠か？ もう十二時だものな……。

いかん。いかんぞ、こんなところで寝ては。拓海のそばに居ないと。這ってでも階段を登り、拓海の部屋にたどり着かないと。だけど無性に眠たい。

## メール

ハッ、寝ていたのか俺。いま何時だ。携帯、携帯と。なんだ、ちよっど一時じゃないか、一時間ほど寝ていたんだ。あれっ、メールが届いている。誰からだ？ 『夢の国へようこそ』って、これは拓海が言っていたメールじゃないか。メール文の下にアドレスも書かれているし。でも何で俺に届くんのだ？ いや、それより拓海を起さないよ。

「拓海ー起きろー、メールが届いたぞ」

「ウーン、やっぱりメールが届いたの」

「ほら、寝ぼけずに早く起きて。おまえが言っていたメールが届いたぞ」

「メールって、何でパクリの携帯が届いたの？」

「そんな事は俺には分らない。言える事はひとつ、メールが届いているって

事だな」

「ほら僕が言っていたとおりでしょ、本当にメールが届くって」

「それよりも拓海、このアドレスをクリックしても良いのか？」

「クリックしても良いかって、それはパクリの携帯でしょう、自分で判断すればいいと思うけど」

そうだな、俺の携帯に届いたメールなものな。俺の判断でクリックするしかない。思い切つてエイッ。……あれっ、へんだな、拓海が言っていた話と違う、何も起こらないぞ。そうか、分ったぞ。拓海の携帯に誰かのいたずらでメールが届くのは真実。だけど、拓海は寝ぼけているから現実の世界と夢の世界が混じったんだ。そうに違いない。

「ねえ、パクリ。外が騒がしくない？」

言われてみると、誰かと誰かが話す声が聞こえる。ちよっと覗いてみるか。うわっ、すごい雪だ。こんなに積もった雪を見るのはスキー場に行ったとき以来じゃないかな。

あれっ、あの車は拓海の親父が乗っている車と同じタイプじゃないかな。でも仕事で今日は帰らないと言っていたし……でも、間違いない、車の運転席に乗り込んだのは拓海の親父だよ。

「拓海！ アレは親父じゃないか？」

「えっ、あつ、本当だ、あの車はお父さんの車だし、そばに居るのはお母さんだ。周りに居る人たちはお父さんの友達で、たぶん子供も一緒に連れてきているんだ」

これじゃまるで、私をスキーに連れて行って、という感じだ。って言うか何で拓海の親父が居るんだ？ 仕事って言っていただろ。帰って来るのであればそれなりに連絡をするはずだろ。

「拓海、親父から帰ってくるって連絡はなかったのか」  
「お父さんから？ そうだメールが届いているかもしれない。あつ届いてるよ、お父さんからのメール。『雪が降ったから仕事を早めに切り上げてスキーに行く事にした、拓海も一緒に行くか？』だって」

「何だよ、えらく急な話じゃないか。それでどうする、スキーに行くの」

「どうすると言われても……」

「とりあえず親父さんの顔を見ておけば、それから考えてもいいだろ」

「そうですね、とりあえずお父さんに会わないと」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

「急げ急げ、あの状況から考えるとすぐにでも出発しそうな雰囲気だった。」

車のエンジン音が聞こえる。もう駄目か、間に合わないのか。あー、駄目だった。親父さんたちは俺たちの事に気づかず出発したよ。でも拓海にメールを送るぐらいだろ、家に息子が居る事を忘れていいのかよ。

「そういうえばパクリ、こんな状況、映画で見たことが無いか？ 子供が家族から忘れられて家に置いてきぼりになったって内容の映画」

「なに馬鹿な事を言ってるんだ。アレは映画の話、今は現実の世界。不思議な出来事が起こるなんて、本当にある訳はないだろ」

「ちよっとパクリ、僕の部屋に誰か居るよ」

「……本当だ、誰か居る。……まさか泥棒って事はないよな」

「パクリ、一階にも誰か居るよ。ほらキッチンの中を歩き回ってる」

本当だ、見かけたことのない大人が歩き回ってる。これはたぶん、親父さんたちが出かけたのを見て、誰も居ないと思った泥棒が侵入したに違いない。こんな時は、やはり警察か？

「君たちはここでなにをしている」

えっ、見付かった？ うわーすげえ凶体の筋肉マン。警察に通報している暇なんか無いよ、このままでは捕まっちゃう。

「拓海、逃げるんだ」「どうやって」「自転車、俺たちには自転車しかない」

愛用の自転車に飛び乗って雪の積もった急坂を必死になって登った。牛利を振り返ると幸いな事におっかない大人どもは追いかけてこない。だからと言って安心する訳にもいかんだろ。ひよっとして文明の利器である車で追いかけて来るかも知れない。

「パクリ、いったい僕たちはどこまで逃げるといいの」

「そんなの分らないよ、とりあえずこの山を登りきってから考えようぜ」

白い息を吐きながら俺たちは山を登る。不思議な事に降り積もった雪は走りやすく、タイヤが滑るって事はなかった。いつの間にか急坂は緩やかな傾斜へと変わり、そして山道の頂上にたどり着いた。

「パクリ、これからどうするの」

「そうだな、まずは警察に連絡しないと」

「でも、山の上だから携帯電話が圏外に成っているよ」

「という事は必然的に山の向こうに下りて助けを呼ぶしかないよな」

「でもパクリ……」

山道の頂上から見る反対側の道は、いま登って来た道よりも急傾斜で、降った先には小さな丘が待っている。これではまるで、スキーのジャンプ台のようだ。ゆっくり降りれば問題はなさそうだが、もしも自転車のタイヤが雪

でスリップすると、どこまで行くのか分らない。

「行こうぜ、拓海。いつまでもここに居る訳には行かない。ひよっとして泥棒が追いかけてくるかもしれないし、この寒さでやられるかもしれない」

「わかったパクリ、思い切って降りよう」

自転車のペダルに少しだけ力を入れる。その力に比例するように俺の身体はやりんこと共にゆっくりと動き始めた。まずい、スピードが出すぎる。だけどブレーキが、ブレーキが効かない。

「拓海！ 駄目だ止まらない。こけるんじゃないぞ、このまま走ってあの丘を越えよう」

「あの丘の向こうには何があるの」

「そんなこと俺に分るか！」

時速百キロ以上でた、と思った。いや本当は、どのぐらいのスピードなのか俺の経験では分らない。とにかくこれまでの人生で一番速いスピードだった。

小さな丘が目の前に迫ってきた。だからと言って何も出来ない俺が空しかった。自転車は丘の頂上を超え、そのまま俺たちは空へと旅立った。

「パクリ、僕たちって空を飛んでいるの？」

「そうだな、この状況を考えると空を飛んでいるとしか思えないよな」

「空を飛ぶのって案外かんたんな事だね」

のんきに話す拓海が、これほどまでにアホだとは思わなかった。飛ぶのは良いが、どうやって着陸すればいいんだ、俺たち。

「ねえパクリ、前から自転車で乗った人がくるよ」

この場合、自転車で乗っているのではなく自転車で飛んでいる人が前から来るんだろ。あれっ、自転車で乗っているのは人ではないように見える。

「ねえパクリ、あれって宇宙人じゃないの」

確かに宇宙人といえば宇宙人のような、だけど相手から見ると俺たちが宇宙人だろ。アレは何のサインだ？ 人差し指を立てているけど、何の意味があるんだ。挨拶の代わりなのか？ だったら俺たちも返さないとな。

「拓海、よく覚えておけよ、宇宙人とすれ違うときは人差し指を伸ばして挨拶するんだ。ほらこんな感じで」

ちよっとだけ宇宙人の人差し指と俺の人差し指が触れ合った。けっこう温かく感じたけど……それよりも俺たちどうやって着陸すればいいんだ？

「パクリ、飛行場だよ。ほらすぐ右下に見える。あそこに着陸すれば良いと思わない？」

「何でこんなに都合よく飛行場があるんだ？ 意や深く考えている暇はない、こけないよう、ゆっくりと着地しよう。それっ。」

### クリスマス

「ねえパクリ、もうクリスマスだね、あんなに綺麗なイルミネーションが輝いているよ。そろそろサンタさんからのプレゼントが届く頃だね」

「サンタからのプレゼントって、おまえいったい何歳だ。まだサンタクロースが居るって信じているのか。俺は十六の時にサンタは居ないって気づいたぞ。お袋が夜中に俺の寝ているそばにプレゼントを置いてるの見たからな。」

「ねえパクリ、この空港って静かなところだね、誰も歩いていないよ」

「そうだ、変だな。空港って大勢歩いているのが普通だよな。あつ、あそこ外国人風の人が居る。だけどなんで迷彩服を着てるんだ。それにマシンガンを背負っているし、仮装行列でも有るのかな、クリスマスだから。」

「パッパッパッパッ」

「ッて、本当のマシンガンじゃねえか、何で俺たち狙われるんだ。「拓海、逃げるんだ」「どこに逃げるの」「そんなの知るか、とにかく逃げるんだ」

「ねえパクリ、ここはいつたいどこ？」

「いちいちうるさい奴だな拓海は。どこに居るのか聞かれても、俺にも分らないよ。ただなんとなく、エアダクトの中で這い蹲っているような姿は想像できる。あれっ、また前から外国人風の男がやってくる。いやこの場合、這い蹲りながら近づいてくるといった方がいいような気がする。」

「Where did you come?」

「はげた頭の外国人にどこから来たのって聞かれてもな「あっちから」って答えるしかないよな。」

「Is it a terrorist?」

「テロリストは見なかったかって聞かれても、その前になんて半そでシャツを着てるんだこの人。とりあえず両手を上げて俺の意思を表したけど、こんなジェスチャーで分るのかな？」

「Do not you fight with the terrorist either?」

「冗談じゃない、どうして俺たちがテロリストと戦わないといけないんだ。いま重要な事は急いで家に帰ることなんだ。俺の下手な英語で通じるか？」

「I must be going because I want to return to the house in a hurry.」

「All right. It fights alone.」

「おお、俺の下手な英語が通じたよ。一人で戦うってさ。さてと、急いで出口を探さないとな。」

「ねえパクリ。こっちの方から風が吹いているような機がするよ」

「言われてみれば、確かに風が吹いているような。現時点では情報がまったくないんだから、風が吹いているだけでも進む価値はありそうだ。」

「よし。俺が前になつて進もう、きつと何処かにつながっているはずだ」

「ひじとひざが擦り切れて痛い。いったいどこまでつながっているんだこのエアダクトは。と思った瞬間、エアダクトが壊れて地面に落ちちゃった。」

「おい拓海、大丈夫か？ 怪我はしなかったらうな」

「ウン、お尻から落ちて尾てい骨が痛いけど、怪我はしてないよ。それよりもパクリ、ここはいつたい何処なの？」

「また、俺たちが何処にいるのか聞かれた。分る訳ないだろ、俺の方が先に知りたいよ。ッて、冷静に判断すればここは駅だな。レールが見えるし時刻表らしいものもある。ただ静かな事がかえって不気味だけだ。」

「幌舞(ほろまい)駅って書いてある。ッてことはここは北海道か？ 何で俺たち北海道にいるんだ？ それよりも早く家に帰る事を考えなくっちゃ。」

「ここは炭鉱の町らしいよ、パクリ」

「炭鉱の町？ 何で知ってるんだ？」

「だってこの観光案内版に書いてあるもん」

「何だ、観光案内版があるのかよ。ふーん、昔はけっこう華やいだ街だったんだな。だけどなー、炭鉱でもう寂れているもんな。」

「ちよつと町を散策してみるか？ 何か情報がかめるかも知れないし」

「ねえパクリ、どうしてあのアパートには黄色いハンカチが干してあるの」

「確かにボロアパートの軒先に黄色いハンカチが数枚干してある。だからと言つてどんな意味が有るのか俺に分る訳はない。」

「駅に戻ろうか。こんな町を散策しても、得られる情報は何も無いようだ」

「あれっ、女子高校生がああ駅舎から出て行った。という事はあの部屋には誰か居るのかも知れない。駅長がいて、話が聞けるかもしれない。」

「御免ください、失礼します」

「ウン、君たちは見かけない高校生だね、こんな町にどこから来たの」

「洪い！ 声も良いし、顔立ちも男らしく凛々しい。この駅長さん、滅茶苦茶かっこいいよ。こんなおじさんに俺もなりたいたい。」

「実は道に迷つて、この町にたどり着いたんです」

「そう、道に迷つたのか。それはいけないね」

「ところで今出て行った女子高校生って誰なんです？」

「ああ、あの子は鉄道マニアだって言って、色々な話をしていたところなんだ。僕にもあのぐらいの年頃の娘がいるはずだった。幼い頃に亡くならなかったらね」

「ちよっとパクリ、そんな話しよりも早く家に帰ろうよ」

「そうだよな。ちよっと駅にいるんだから列車に乗れば家に帰る事は可能だろう、駅長に詳しく聞いてみよう。」

最後はなぜかダムだった

『お客様にご連絡いたします。この列車は吹雪の影響と機関の故障のため、暫らくの間停車いたします。天候が回復し、機関が復旧するめどが立ち次第、出発のご連絡をいたしますので、もう暫らくお待ちください』

何だよ、せつかく家に帰れると思っていたのに。こんな山奥で止まっちゃって。だいたいなぜ、ダムのほとりに列車のレールが敷かれているの。こんなところに線路を敷いた奴の顔が見たい。って愚痴ってもしょうがないか。「ねえパクリ、質問をしても良い？ いまさっきまで北海道にいたでしょ、その前は何処かの空港にいて。それなのになぜいまは、新潟県奥遠和ダムのそばにいるの、矛盾していない？」

「その前に、なぜここが新潟県奥遠和ダムだと知っているんだ」

「だって、そこに書いてあるもん」

確かに目の前には新潟県奥遠和ダムと書かれた一枚のレポート用紙がある。もちろんそれ以外にも書かれている。本音を言えば『疲れた』こんなにいっぱい文字を書く羽目になろうとは思ってなかった。だが、この大冒険も終わりに近づいている、なんととしても書き終えないと。

「あれっ、パクリ。あの人たちって警察官じゃないかな」

あつ、ホントだよ。何でこんな場所にあんなに大勢、警察官がいるんだ。「乗客の皆さまにお知らせします。このあたりには避難勧告が出されています。直ちに列車から降りられるようお願いいたします」

何でここまで来て、列車から降りないといけないんだ？ あつ、あのカメラを持った人は新聞記者みたいだ、ちよっと聞いてみようか。

「何か事件でも起こったのですか」

「詳しい事はいえないがダムを乗っ取ったテロリスト集団がいるらしい。君たち何か見なかったかな？」

「いえ、何も見ませんでしたけど」

「これはオフレコの情報だけど、犯人グループは、ダムとダム職員を人質に取って五十億円を政府に要求しているらしい。要求を拒否すれば人質を殺し、ダムを爆発すると政府に対して通告している様子だ」

「その話、本当ですか」

「本当の話だ。だけど心配をする必要はない。確かにダムが決壊すれば、下流域の二十万世帯は一瞬のうちに洪水に飲まれてしまう。そんなことにならないよう、ヒーローがダムの近くに隠れている」

「ヒーローって誰？」

「それはいま、言えない。映画を見る人なら誰もが知っているヒーローだよ。何てことだ。ダムを乗っ取るテロリストがいるなんて。まるで映画の中に溶け込んだような……そんなことより、この状況から逃げ出さないと。」

「拓海。逃げよう」

「逃げようっていったい何処へ」

「そんなの分らないよ。逃げれる場所まで逃げるんだ」

ひどい吹雪だ、何でこんな吹雪の中、しかも山奥で逃げ回らないといけないんだ。ウン、何だこの音は？

パラッパラッパラッパラッ

何でヘリコプターが頭の上を飛び回るんだ。そうか、犯人が載って逃げまわっているんだな。それとも警察が犯人を追っているのかもしれない。いや、いま重要な事は、ヘリコプターのローターが作りだす音と、強烈な風が原因で雪崩が起きる事だ。

そんなことも知らずにヘリコプターは飛び回っているのか？ どこかに行ってしまえ、世間知らずの操縦者よ。

ほら見る、真つ白な雪が崩れ始めた。崩れ始めた雪が白いカーテンを作り出し、その白いカーテンが俺を襲ってくるよー。

チクショウ、何で雪崩に巻き込まれるんだ。逃げてやる、絶対にこの雪崩から逃げてやる。こんな山奥で死んでたまるか！ もがくんだ、ゆきのなかで、必死にもがくと雪崩から逃げられるって聞いたことがある。

「ねえ、パクリ。こんな階段で白いジャケットだけ着て寝ていると風邪をひくよ。それにもう朝だから起きる準備をしないと怒られるよ。それからひとつだけ聞いてもいい？ メールは届いたの、それとも届かなかったの」

了